

なんだろ, ってなんだろう?

い つのころからか、若者たちのことばに、「なんだろ」が挟み込まれている。「ろ」は歯切れよくスタッカート。「それなら昔から使っているよ。『あの子が好きななんだろ?』だろ?」。それではない。また、単に疑問を投げかける使い方とも違う。例えば、「たくさんアイデアはあるんだけど、なんだろ、いまひとつインパクトに欠けるんだ……」と頭の中で言いたいことを整理する間が欲しいときに入れたり、「それはつまり、なんだろ、そう、僕が言いたいのは……」と自問自答するように「なんだろ」は入ってくる。

語尾を伸ばした「なんだろう」も使っている。少しほのぼのとした感じで、「この手触り、なんだろう、幸せな気持ちになるっ」とか、「この歌を聞いたら、なんだろう、涙が出そうになる」という具合に、自分の心のうちを告白するときや、ことばにするのをためらっているときに「なんだろう」は出てくるようだ。ほとんど意味がわからないときもある。「わたし、なんだろう、マスクはピンクがよくない?」。

「なんだろ(う)」が気になり始めたある日、50代と30代の女性2人がトーク番

組で、「なんか」を連発していた。あとで数えたら、ある場面では1分半の間に2人で10回、別の場面では1分間に11回連呼していた。多すぎる。「なんだろ(う)」と「なんか」は、ことばの使い方が似ているが、口癖になって頻繁に言ってしまうと聞き苦しく、あまりいい印象を持たれないところもよく似ているようだ。

さて、「なんだろ(う)」や「なんか」は、それ自体に大した意味はない。しかし、意味のあることばだけの話は、ややもすると一方的に話されているようで、お説教されている気分になることもある。人と人との会話は、相手の表情や気持ちをくみ取りながら話すもの。言ってみればこうした“遊びのことば”は、一緒に「なんだろ(う)」と考えたり、相手の気持ちを想像するのに必要な役割を果たしているのではないだろうか。

ことばは、その人がどんなことばの世界に住んでいるかを正直に表してしまう。いつまでも若々しく思われたいけれど、なんだろ、無理して使っているように思われたいよう、品よく使いたいなあ。

兼清麻美(かねきよ あさみ)